

一人ひとりの死生観と健康自律を支える 超高齢社会の創生

Creation of a Super-Aging Society that Encourages Respect for Individual Views on an End-of-Life Good and Honorable Death and Supporting Personal Autonomy in Health Care

プロジェクトリーダー 佐藤真一（人間科学研究科教授・老年心理学）

学内のコメンタリー

土岐博（大阪大学名誉教授・理論核物理学） 山川みやえ（大阪大学大学院医学系研究科准教授・老年看護学） 鈴木径一郎（大阪大学産学共創機構特任助教・臨床哲学）
大庭輝（大阪大学大学院人間科学研究科助教・老年臨床心理学） 桂結衣（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程・臨床哲学）

1. プロジェクト概要

大阪大学の文理各分野の研究者だけでなく、地域で超高齢社会の課題に取り組んでいる多様な個人や団体、さらには大阪府や近隣の自治体との協力体制のもとに、科学的方法による根拠のあるデータ解析と、多様な形で個人に現前する人生後半期のライフイベントに関する哲学的思索を融合させることによる政策提言を目指して、超高齢社会の課題に挑みます。

2. 2019年の取り組みと成果

①大阪府保険者協議会（大阪府設置）からの依頼を受ける形で大阪府民の健診、医療レセプト、介護保険等のデータを一元的に取りまとめて解析を行っています。1TB（約300万人×6年間分）というビッグデータの整備と管理体制とを進めながら、本年度は、「健診データと介護データの関連性」、「人工知能による健康因子間の関係の推定」、「健診データ項目と保健指導の地域差解析」、「生活習慣病・慢性心臓病の発症を予測する特定健診項目の検討」、「メタボリックシンドロームの地域差分布解析」、「介護認定後に要する医療費の変化解析」等の成果を得ました。大阪府民の健康増進、認知症との共生および予防、地域保健活動の高度化、さらには生と死を我が事として考える機会（健康自律）の提供等に資することを目的に政策提言を目指しています。

②地域住民の自律的な健康観や死生観を醸成する活動として近隣自治体にて継続的に哲学カフェを開催し、哲学対話を通して住民とともに超高齢社会の課題を考える機会を提供しています。本年度は北摂地域で15回実施し、高齢者を中心に延べ約240名が参加しました。第20回日本認知症ケア学会（5月25日京都）に参加してこれまでの成果を発表したため、雑誌掲載、

見学者増といった反響も大きく、新たに2箇所での哲学カフェを開始しました。

③「図書館と認知症」では、図書館を超高齢社会にふさわしい知の場所にするための公共図書館のあり方を変える取り組みに関わっています。本年度は「多世代交流と地域共生のための図書館とは？」と題したフォーラム等に参加し、図書館内の空間の効果的利用を促すための空間評価法であるキャプション評価を実施しました。第20回日本認知症ケア学会では、図書館員、医療者、福祉関係者、建築の専門家が登壇するセッションを企画・実施したところ、120名を超える参加者

高齢者のみなさま 集いませんか?!

～哲学カフェのルール～

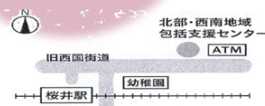
- ① 感じたことは何を話してもよい
- ② 人の話を否定しない
- ③ 話したくなければ話さなくてよい

日時：2019年11月22日（金）

14時～15時半

場所：てりは包カフェ

箕面市桜井1-13-22 北部西南地域包括支援センター内



申し込みはお電話で

☎ 072-737-6312
(なな-る訪問看護ステーション)

主催

なな-る
訪問看護ステーション

参加無料
コーヒー付



哲学
カフェ

redPost 大阪大学

哲学カフェ チラシ

根拠のあるデータ解析と哲学的思索の融合

がありました。8月には第1回大阪公共図書館協会研修会にてキャプション評価のワークショップを行い、図書館員を中心に60名程度が参加しました。こうしたキャプション評価の内容は、9月に大阪市中央図書館で開催されたCode4lib（参加者100名程度）でも実施しました。12月からは堺市の図書館が認知症にやさしい小さな本棚を堺市の各医療機関の外来に設置するという事も進めています。また、2020年2月末に開催する「多世代交流と地域共生のための図書館とは？」の企画も進めているところです。

④認知症の人にやさしい診断・ケア用ツールCANDyの研究では、評価精度の検証に向けたデータ収集を開始しました。具体的には、高知工科大学の朴啓彰客員教授を代表とする高知県田野町での高齢者の自動車運転に関する調査におけるCANDyの測定と、滋賀県立総合病院精神科で認知症疾患や重症度別のデータの収集を開始しました。普及・活用面では、東京都福祉保健局から認知症検診用のCANDyの使用マニュアルの作成依頼があり、提供しました。さらに、経団連21世紀政策研究所からCANDyの精度や生活場面における活用可能性について話題提供の依頼があり、発表を行うとともに、経済学や法学の研究者と議論しました。

⑤人材育成については、哲学カフェのファシリテ

タ育成のために、RAを雇用して地域人材の養成に向けた調査研究をスタートしました。調査結果については、堺市立西図書館の協力のもと、2020年1月に羽衣国際大学にてファシリテータ養成セミナー、2月に市立西図書館にてセミナー受講者による哲学カフェを実施し、検証する予定です。

3. プロジェクトの今後

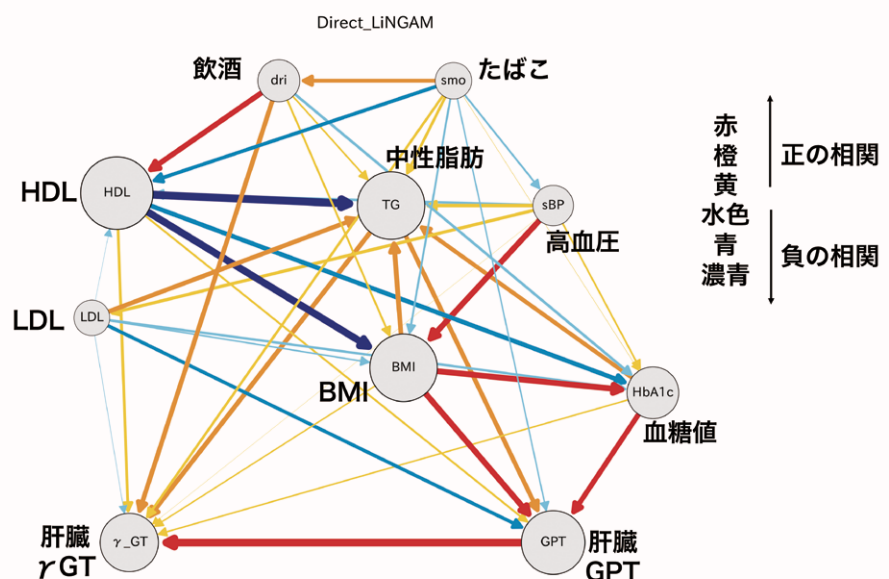
協力プロジェクトから基幹プロジェクトへの変更に伴って、2019年6月に基幹プロジェクト拡大ミーティングを開催しました。豊中市からは財務部長、福祉部長を含む幹部の方々、箕面市からは地域包括ケア室幹部の方々と社会福祉協会事務局長、その他に医療法人、社会福祉法人、NPO法人の代表者等、総勢24名が参加しました（吹田市健康医療部および中央図書館の職員5名は吹田市健都プロジェクトの会議と重なり欠席）。以上のような基軸となるメンバーを学内外から選抜することで地域のハブとなることを目指すとともに、若手研究者や学生の参加を促して、社会的課題の解決に向かう人材を育成する予定です。また、本プロジェクトのホームページを開設して、日々取り組んでいる課題の動きを迅速に公開したいと考えています。



図書館空間のキャプション評価



第20回日本認知症ケア学会シンポジウムの様子



人工知能による健康因子の因果関係と相関の強さ
健康因子間の因果関係をデータのみから推定し、相関の強さを同定しました。飲酒はHDLを上げ、HDLはBMIと中性脂肪（TG）を大きく下げる効果を持ち、HbA1cを下げる働きも持っています。BMIは高血圧から悪い影響を受ける一方で、血糖値を上げGPTをあげる役割をしています。（論文投稿中）